

近江の懷をめぐる 6

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川

亮

近江の懷をめぐる 6

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員 石川 亮

Name:

ISHIKAWA Ryo

Title:

Omi's "Futokoro": Part Six

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懷」とは、近江（滋賀県）という風土に根を下ろして未来社会へ向けてものづくりや新たなライフスタイルや伝統の継承などを実践し発信している人々と、それらを育む近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中に生きづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当て、主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に「近江の懷」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につながる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二三年一月現在まで二回の連載が継続されており、二〇二二年一月より二〇二二年十月までの第二十回から第二三回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

六回目となる「近江の懷をめぐる」研究活動は

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染拡大が始まってから四年目を迎えている。マスク装着でのロードバイクによるフィールドワークはすっかりライフスタイルとなった。筆者がこの文書をまとめる二〇二三年一月、行動制限のないお正月を三年ぶりに迎え、ウィズコロナ社会に入っているものの、全国の感染者数は合計三〇〇〇万人を超えている。新型コロナウイルスとの共生がまだまだ続くことは誰もが了解せざるを得ない状況である。

二〇二二年は如何にしてその「禍」と共生し、新たな暮らし方を見出して持続していくか、それを具体的に実行している人々に焦点を当てることになった。

始めは東海道石部宿、二〇一七年から活動してきた東海道統一案内看板設置で縁ができた湖南市に位置する石部宿へのライド取材から始まる。そこで地域おこし協力隊の仕組みを使って移住し、石部景観まちづくり検討会に属して協力を得ながら、新たな「なりわい」をスタートさせた三組のクリエイターのライフスタイルに注目した。次に琵琶湖の東岸、ビワイチルートに指定されているさざなみ街道沿いの大藪の集落より、祖父母が住んでいた土地に移住してシャッブづくりをするクラフトマンを訪問した。そして中山道と八風街道の分岐点である武佐の地に

新たなパン工房と店舗をスタートさせたパン職人のスタンスに焦点を当てた。これまで日本各地で培ってきた様々なパンづくりの経験を活かし、地元の食材を使用し、地域の人々へ向けたパンづくりで新たな食文化を伝えていく。最後に湖西のビワイチルートと重なる北国海道（西近江路）沿いでスポーツ自転車店を営む自転車技師の活動を追った。今日のビワイチ推進活動の積み上げに尽力しつつ、自転車による新たなコミュニティとライフスタイルを広げている。

彼らに共通するのは、偶然であるが近世から続く街道沿いに仕事場を構え、今日社会の様々な仕組みを上手く使いながら新たな「なりわい」を立ち上げている点である。そして原料調達、製造、製品管理、営業、販売などこれまで分業化されていた仕事の大半を自身で行い、自らマネージメントしているところである。またこれまで積み上げてきた仕事の経験を活かし自らの手で「新たな城（仕事場）」を築き、「やりたいこと」を「なりわい」として軌道にのせているところである。前回の「近江の懐をめぐる五」同様、自転車でのアプローチでなければ出会えなかった場所に拠点を構え、コロナ禍を契機にライフスタイルを見直し、既に一歩二歩と踏み出している四地域六者をみていきたい。

一、石部の三軒

「京立ち、石部泊まり」で知られる東海道石部宿は、

歌川広重の浮世絵でも表現されるように田楽茶屋が象徴的に描かれている。茶屋は旅人と地元の人々が情報交流するコミュニティスペースと言える。

二〇二〇年秋、湖南市石部学区まちづくり協議会の依頼を受け、二〇一七年より大津と草津で始まった東海道統一案内看板設置の相談と、それに合わせた「石部宿オリジナル看板」作成依頼を受けた。二〇二一年春、田楽茶屋をイメージしたロゴマークが完成し、街角サロン「いしべ宿驛」に設置したのは記憶に新しい。この縁から湖南市地域おこし協力隊の活動を知り、民家を有効活用する創造的な活動を知ることになる。

ここで湖南市の地域おこし協力隊の仕組みについてであるが、NCL (Next Commons Lab) という全国でネットワークを展開する組織と一緒に取り組まれてきたことが特異性としてあげられる。双方のやりたいことを調整しつつ活動しているNCLを紹介して立ち上がった新たな施設三軒に焦点を当てたい。

・name Co. (ナメロー・豆講)

一軒目はname Co.だ。ここに仕掛けの張本人、NCLメンバーでありながら地域おこし協力隊であり、看板制作で出会ったまちづくり協議会のメンバーでもある長砂伸也さんがいる。name Co.は私設公民館であり、塾、カフェでもある。名前についてだが、この地域で古くから小さな寄り合いを豆講とよび、今もその文化が残っていることが由来であ

る。この場で地域の人々がやりたいことを介して交流できる。さらには小中高生たちの居場所が少ないことから、この場づくりが始まっている。もともとあった店舗の電飾看板や外壁を活かしながら最小限のリノベーションをしているところも工夫に富んでいる面白。お話を伺うと豆には二つの形があるとのこと、一つは腎臓型のビーン、もう一つは丸型のビーであり、それがCとOに見えることからロゴマークをOで表している。中に入ると壁材と天井材が外され柱が剥き出しになっている。格子状に見える部位は棚や商品を展示しやすくてDIY仕様になっている。壁に目をやると変形した計量容器が見えた。それは地域の子供と揚げ物をつくるワークショップを行った時、フライパンに残った油を他の容器に移し替えようとして、その容器に入れたところ、瞬間にプラスチックが変形した。この時「アウト!」と子供が叫んだことから「アウトなアート」と名付け展示することにしたそうだ。他にもママ友が集う場として子供服の交換会場となっており地域の方々が集う場となっている。

・DONGREE BOOKS & STORY CAFE

二軒目はブックアンドカフェのドングリーだ。石部宿西縄手から東へ、クランクの二つ目の角の奥に吉御子神社が鎮座しているがその手前にお店は位置している。民家の玄関には古い煉瓦と白い扉、鹿の角のドアノブで迎えてくれる。初めてお伺いしたのは二〇二〇年十二月、東海道統一案内看板でまちづ

くり協議会に出席する際に訪問した。カフェオーブンを目前に開店準備の時である。様々な色、材料、形の床材がパッチワークされている。店内には木製丸テーブルがいくつか配置され、形の違う椅子がおさめられていた。店主のドリーさんが「地域の方々と一緒に作ったんです！」話されていたことを覚えている。改めて二〇二二年、年明けに取材するとお客さんで賑わっており、お店を目的に来店されていることが伝わってくる。店内にはあちこちに本棚があり、選りすぐりのクラフト作品が展示販売されていた。コーヒー焙煎も始められ、石部ブレンドと湖南ブレンドの二種が目に入ってきた。スタートは京都東山のドングリーコーヒースタンドから、さらに本を介して地域の人や起業を目指す人、未来の新たな暮らしを目指す人などが交流できる場づくりを目指し、次のステージとして石部を選ばれたそうだった。棚の本には読者が好きなページに感想や思いを葉に書き綴り、次に読む人が偶然見つけて交流を生む「葉本」という仕組みがセットされている。最後に「原始物々交換の時代の贈与（ギフト）しあうような世界観を目指したいのです」と話されていたのが印象的だった。

・まるとしかく

三軒目は東海道を東へ石部小学校近くに位置するアートスペースと一棟貸のお宿である。昭和の匂いを漂わせながらも素材に拘った空間づくりと、そこに住まう家族を紹介する。壁は天然の藁を練り込ん

だ漆喰仕上げで統一され、和室の畳縁は生成り素材に統一されている。床間は宿主の近藤洋平さんの作品が展示されている。仕切りにはミラー加工を施したガラス戸がはまり、外の風景や隣の空間が写り合って、広さと明るさを感じる空間である。二階は街道に面して大きな窓が一つあり、切り取られた空間に向いの瓦屋根が見え、東海道の風景として新鮮である。照明は裸電球のライトが柔らかく空間を照らしている。宿の機能を妨げることなく、所々に作品が展示され、ミニマリズムを思わせる空間でありながら昭和の住宅の間取りであることに驚く。洋平さんの妻、桃子さんは一階のキッチンカフェで愛娘の空ちゃんと空間を見守っている。しかし二〇二〇年のスタート早々、計画は一転した。インバウンドの旅行客に「日本の暮らし体験」をコンセプトに作られた空間はコロナ禍により模索の毎日を強いられ、空間の活用を様々な設定に変更して対応を始めている。桃子さんに実情を尋ねると、子育て奮闘中で草津の保育園へ送り迎いのための車を用立てしてくださるなど、地域の方々が様々なあり方で助けてくださっているとの返答があった。洋平さんには安土のヨシを使ったヨシ葺きの仕事が舞い込んだ。美術家だからこその素材を扱う仕事依頼は、「宿づくりの拘り」があることが周囲からの支え合いを結んでいる。宿名の「しかく」はドットや規則性を「まる」はご縁や柔軟性を想起させ、このバランスを成り立たせている。

コロナ禍の猛威は感染症のみならず孤立や分断を



写真5 吉御子神社近くの「DONGREE BOOKS & STORY CAFE」玄関



写真6 「DONGREE BOOKS & STORY CAFE」店内の様子



写真3 「mame Co-」の長砂伸也さん



写真4 「アウトなアート」が展示されている



写真1 いしべ宿駅に設置した看板



写真2 ロゴのあった喫茶マメコーの看板

二、大藪のシャツ屋

さざなみ街道を北上、滋賀県立大学前を過ぎたあたりから、ビワイチをするならそろそろ本気でペダ

生み、人間の精神をも蝕んでいるように思える。一方「近江の懐」には、全国の旅人を受け入れる潜在能力がある。新たに展開しようとする石部の三軒と地域の関係性に共助の精神がみえた。



写真9「まとしかく」の近藤洋平さんと桃子さん夫妻



写真10「まとしかく」の空間



写真7 某本を紹介するドリーさん



写真8 東海道沿いにある「まとしかく」

ルを踏みこむ時間になるのだが、二〇二〇年にこのあたりへ移転したシャツ屋さんのことを思い出した。すっかりコロナウイルスと共存する社会になってしまった二〇二二年四月、あらためて訪問した。犬上川を渡ると右手に旧道があらわれ、そこを進むと「大藪」と言う集落に入る。中心部には西福寺と神明神社があり近江の字の特徴を色濃く表している。その寺と神社を結ぶ中間地点に位置するのがシャツ工房兼店舗の「COMMUNE」である。コミュニティと聞いて連想するのは「共同体」やイタリアの最小自治体組織「コムーネ」である。大藪／字に位置するコミュニティ店主久米勝智さんにお話を伺った。

久米さんとの出会いは二〇一五年である。以前からシャツの生産から販売まで全てを一人でこなすクラフトマンがいることは聞いていた。当時、私は琵琶湖の淡水真珠の魅力発信に取り組むプロジェクトに携わっていた。淡水真珠をつくる池蝶貝の貝殻を活用したアイデアや製品を開発する中、その貝ボタンのついたシャツをつくってくださったことを覚えていた。その後、何度かお会いする中、店舗の移転を検討されていることも話されていた。

久米さんは地元の高校を卒業後、東京の服飾専門学校でスキルを身につけ、アパレル業界の世界を知る。その後、京都のシャツメーカーで修行を積み、その経験からシャツづくりにおける全ての仕事を身につけるため、パタンナー、お直し、印刷会社を経て二〇〇九年彦根市中心部にお店を開く。「様々な仕事に就いたが、日頃のシャツづくりは続けていた

のです。シャツづくりの疑問が見えたと解るまで突き詰める性分なのです」と、仕事の遍歴から地元で開店するまでの経緯を聞くと、意外に拘りは無く、めぐり合わせや縁が今日までの継続、持続であることがわかる。一つの職場に止まることがなかった理由に「アパレル業界のキラキラした世界の反面、どこか宙に浮いた感じが自分に合わなかった」「マーケティングや戦略が先行する感じが違和感を感じていた」と仕事の起点となる時期に大きな決断をしてきたことが現在の久米さんの立ち位置を決定付けているように思う。それでも「シャツが好き、自分の着たいシャツが作りたいたい」を忘れず「向いてる方へ、合ってる方へ」進んできたと話されるクラフトマン精神があふれる様子が印象的である。

次に数年前から計画していた移転に関してだが、なぜ大藪の地を選んだのか理由を聞くと、「実はここは祖母の家やった場所なんです。この庭で小さい頃、従兄弟と集まって遊んでたんです。さざなみ街道が整備される前はそのまま琵琶湖へ行けたんです」との答えが返ってきた。やがて祖母の家が空き家になり、近くに住む親戚と交代で掃除や整理をしている中、「この土地が他人の手に移っていくことが想像できないと自覚するようになった」と話された。更にこの時期、久米さんに新しい家族ができたことや、自分が見てきた風景に地に足を着け、好きなシャツが作れることから、この地に移転することを決断された。

一方で大藪の地域住人に聞き取りをすると毎年空

き家が増えているとのこと、ここでも高齢化は進み、進学や就職を期に子供がこの地を出ると、古い慣習に戻ることもなかなか難しいようである。実際に旧道沿いには更地となった空間が所々確認できた。

さて、このような市街地から離れた静かな場所得手づくりシャツ生産の生業が成り立つのだろうかという疑問を持つ。久米さんのシャツは素材選びからデザイン、製造、製品管理、営業、販売等々、全てを自分一人で行っている。そもそもアパレル業界はこれらを分業化して効率重視で生産販売がされてきた。シャツは誰もが一枚は持ち、年に一枚は買うものだろう。消耗品と考えるならより安価で効率が求められる。それと比べ久米さんのつくるシャツは非効率的で、全てを手作業でつくることから価格も決して安価とは言えない。

しかし、久米さんの「向いてる方へ、合ってる方へ」のスタンスを一定支持する層がいるのだ。今日のネット注文ができる仕組みも然りだが、ものづくりの姿勢の価値を共有できる催事に呼ばれ、全国のあちこちで出品されている。そこでは互いをリスペクトしあえるクラフトマンとそのファンが集い、即売が行われている。催事から仕事場に帰るといつもの風景を見ながら、つくれる分だけのシャツづくりとお直しや修理を引き受けている。大量生産、消費、廃棄とは違うところに久米さんのものづくりはあるのだろう。

大藪に移転して二年、仕事場兼住居にする為、新築となったが三角屋根に杉材の外壁は近江の風景に



写真15 仕事を進めながら対話が始まる (久米勝智さん)



写真13 仕事場から見える風景



写真11 玄関、シャツの生地が迎える



写真16 旧道沿いに溶け込む仕事場兼住居 (右)



写真14 一着分のシャツの型紙が用意されている



写真12 店内に並ぶシャツ



写真17 変わらぬ風景を前に (久米さん)

溶け込んでいる。ご近所さんは既に久米さんの連絡先を知っていて、仕事場からの風景には隣の畑が入り込んでいる。地域のつながり「ゆるい境界」が心地良いようだ。

「あんまり世の中の邪魔にならん程度に作ろう」と久米さんはミシンの前で呟いた。

三、武佐の道標パン

「道標」がタイトル中に入る「近江の懐」は今回で三度目になる。あらためてその趣旨を確認するなら、街道から入り宿場町を起点としながら町の魅力やそこで萌芽する新たな動きに迫っていく。それを支える背景に焦点を当てる。すると必ずそこには歴史を見てきた道標が建っているのだ。これまで彼方此方と巡る中、中山道と八風街道が交差する武佐(近江八幡市)は行動の起点となっていた。この地に二〇二一年十一月に小さなパン店が開店したと聞きつ

けた。私ごとであるが、京都での学生時代から新しいパン店が開くとすぐ食べ、「やれ何系だ！」などと分類していた。今日も学生とフィールドワークの最中にパン店を見つけては食べ比べしている。今回は道標のある地、武佐の新しいパン店に焦点を当てる。

中山道を彦根方面へ日野川を過ぎて馬淵の集落から国道八号線と合流する。しばらく並走して西宿町の信号を右に入ると旧道に戻ってきた。伊庭貞剛邸跡地の大楠を目印に近江鉄道武佐駅を過ぎると武佐宿中心地に入る。愛宕山と記された石碑を目にし、宿場町にある火伏せの祈りを確認したところで八風街道との交差点に到着する。ここにある道標は後述するとして、右折し八日市方向へ三〇〇メートル程のところ倉庫が見える。ここが今回のパン店だ。

パン店にはその特徴を色濃く出すパンが必ずある。いまのところ迷わずそれは「明太フランス」で、国産小麦とバターのみで生地づくりをする正統派のハード系パンの店、と言って良いだろう。店主の岡田英記さんにお話を伺うことができた。

岡田さんは近江八幡市安土町出身、パン職人の道は京都から始まる。その後、大阪の茨木で見習いを始め守口にある大手スーパーチェーンに入るお店からスタートする。程なくして滋賀守山の一〇〇円パンのお店に入るが、すぐに社長命令で九州福岡に研修へ行くこととなる。ここからが岡田さんのパンづくり人生の始まりとなる。「冷凍ストックしても美味しい」をコンセプトにした箱崎九大前にある「パンストック」が研修先である。テレビ放送での紹介

を契機に行列のできるパン店となった店で、都市部から離れていても勝負できるパンづくりの経験を積むこととなった。購入した次の日に美味しくなるように調整する技術や、「明太フランス」の技もここで習得された。その後、関西に戻った岡田さんはパン職人として活躍と休職を繰り返す。次の転機は大阪箕面に開店するデニッシュパンづくりの職人として声がかかる。ここでは、パンの品質管理は当然のこと、マーケティングからその展開までを任される。その期待に応え大手百貨店への出店を依頼されるまでの成功をおさめるが、事務所で数時間の仮眠をとりながら働き続ける日々が続いたようだ。「プレッシャーが凄かったです！」。この仕事が一段落するとまたしても休職期間。岡田さんは「また二トの時間が来るんです」と笑いながら語る。

その後、岡田さんは郷里の安土で自分のお店を開くことを計画し場所探しが始まる。なかなか見つからないでいたところ、大阪箕面時代にパン職人として出演したラジオ番組で知り合った不動産関係の人を思い出す。番組では近江八幡、武佐の地元話が話題だった。そのご縁で武佐近くの土地を分けていただくことになった。偶然ではあるが岡田さんの母方の実家は武佐、様々な条件が揃ったところで次の人生へ決断することになる。

二〇二一年十一月、八風街道沿いに建つ小さな倉庫を自らの届く範囲で改装され、次のパンづくり人生が始まった。従業員には近所のパートの方やお母様の姿もある。岡田さんのパンづくり人生に魅了

された若いスタッフもいて、見習いからパン販売へと様々な仕事の可能性に着手しているようだ。今後の展望を聞くと「全て近江八幡の材料でカヌレをつくりたいと思っています！」。滋賀県産の餅小麦や米粉を使用した新たな展開は少しずつ実験が始まっている。

取材に伺ったのは土曜日であるが売り切れる前にお店にたどり着くことができた。販売スペースは二人が入れるくらいの広さで、コロナ禍とあってか次の人は店先で待つことになる。当日も客足が絶える間がなく地域にじわじわ広がっているとわかる。

さて、道標であるが、木村至宏著『近江の道標 歴史街道の証人』によれば、文政四年（一八二二）に建てられた道標には「いせみな口ひの八日市道」と刻まれ、商人の町といえる日野、あるいは八日市さらには東海道水口から伊勢へと通じる重要な道であった、と記されている。

様々なパンづくりの経験を経て武佐にたどり着いた岡田さん、店名を「ブルーランジェ・パンスタンダード」とした思いを聞くと、「皆さんに普通のパンを食べてもらいたい」。ここにしかない新たなパンが仕上がることを期待しつつ、持続可能なものづくりとその道が続いている。と、パンストックと同じデザインのカリウムパンを食べながら考えた。



写真24 クレームパティシエール(クリームパン)



写真22 仕事場にて(岡田英記さん)



写真20 武佐宿に建つ愛宕さん



写真18 武佐の道標(八風街道:八日市方面)



写真23 店頭に並ぶパン



写真21 パンスタンダードの店先



写真19 道標より街道を望む(中山道:京都方面)

四、小野の自転車処

自転車に乗ることが生活の一部になって二年が過ぎた。その目的は移動手段ではなく乗ること自体にある。大きく呼吸をすること、季節の変化を体感するなど、自身を一度空っぽの状態にできるのだ。外からの刺激を受けることで、ふつと自身の中に湧き上がる思いやアイデアが整理されていくように感じるのだが、これは作品をつくる前の状態に似ているのではないかと考えている。北国海道(西近江路)道を北上してJR小野駅と合流する交通の要衝に板壁の一軒家がある。ここが今回の「近江の懐」だ。

板壁に大きく「[Dotershi]」の文字、前の電柱にはロードバイクのアイコンと「どてるし」と記された看板があげられている。扉前にはソフトクリームのオブジェがありなんとも不思議な様相を放っている。ここはお食事処ならぬ「自転車処 どてるし」と称す琵琶湖のそばのスポーツ自転車店、ビワイチサイクリストが立ち寄る憩いの場である。部品交換など相談に快くのつてくださる店主で自転車技師の吉本丈一さんにお話を聞くことができた。

吉本さんの自転車と共に送る人生は通学用自転車に始まり高校、大学とサイクリング部に所属、卒業後は京都の自転車卸し業に勤務、次に名古屋の大手自転車店で技師、営業、販売の経験を積まれた叩き上げの自転車人と言って良いだろう。日本のあちこちを自転車で旅をされてきた経験から独立するなら琵琶湖のそばと決めていたそうだ。そしてビワイチ

コース沿いの小野に二〇一五年一月十五日より「どてるし」操業が始まる。この地を選んだ理由は住宅地近隣にすぐサイクリングができる環境であることや行政が積極的に推進していること、「家の前からコースで信号が少なく、ずっと走り続けることができる場所なんてそうないですよ!」と話されたのは驚きだった。確かにその通りで普段気にも留めずベダルを踏んでいるが、自転車に乗り出して最初に感じた「何で今までやらなかったんやろう!」を思い返した。吉本さんは次にこうも話す。「しかし、サイクリストのご近所さんが意外に少ないんですね!住みやすいからでなんでしょうね!」と、他府県から毎年訪れるリピーターのサイクリストさんとの交流が実は多いようだ。足元の魅力には気付かないもので滋賀に住んで二十年以上になる私自身がその代表である。

さて、操業スタート時は今も一部続くビワイチ救助隊から始まる。対岸の彦根にある五環生活さんと連携してビワイチチャレンジに力尽きたサイクリストのサポートやレンタルバイクの修理、輪行バッグの貸し出しなど様々な体制づくりに取り組んできた。駅近くに店を構えるのもその理由の一つであろう。自転車を組み立て、只々たくさん売りたいだけではない何か新たなニーズを見出していくスタンスは、近世の街道で伊勢参りや本山参りで行き交う人々を相手に様々な工夫で旅のサポートをする商いに通じるように思う。決して自身の儲けだけでなくめぐりめぐって社会がアップデートすることを望む「陰徳

「善事」の精神に通ずる。このような個々の見えない積み上げがビワイチ推進につながっている。吉本さんの大手での下積み経験が現在の考え方を作っている。「金額（時間）に見合った仕事をしろ！」と言われ一定のノルマを達成させることが企業経営である。時短、効率を考え一人のお客さんに使う手間や相談も換算されていくのだ。十万円以下で買えるクロスバイクもあれば一〇〇万円を超えるロードバイクもある。しかし、一台の自転車を安全に楽しく乗ってもらうことに変わりはない。自転車に乗ろうとする様々な人と予算や用途など密にコミュニケーションをとることが大切なのだ。「その人にあった自転車を相談しながらじっくり組み上げていくには一人でないとできない」と語る。

大手での仕事癖が仇になることもある。多種の部品発注をしてその互換性研究をするなど、技師として仕事に専念し過ぎて費用対効果を忘れてしまうことも悩みの一つのようなのだ。一人で自転車店を経営することは本当に好きで、自転車のある暮らしに未来を描いていないとできない。

十一月三日は文化の日、滋賀県は二〇二二年よりこの日を「ビワイチの日」とし、「ビワイチ推進条例」を制定した。当日、吉本さんに「どてるし紅葉ライド」に誘っていただいた。朝十時、どてるし前には老若男女十三名が集まっている。皆さんはお店にご縁がある人達だ。近江八幡から夫婦で、奈良からのライド仲間など自転車に乗ることを目的とする集まりである。仕事や研究仲間以外でのコミュニティは



写真29 紅葉と自転車



写真27 店内から琵琶湖が望める



写真25 「自転車処 どてるし」店主で自転車技師の吉本丈一さん



写真30 どてるし店前にて(11月3日)



写真28 どてるし紅葉ライド(還来神社にて)



写真26 どてるし店内(様々なタイプの完成車が並ぶ)

なかなか新鮮なことに気付く。自身が何者かが問題ではなく、自転車に乗ることを楽しめるかが重要だ。コースは小野から途中峠を越え大原へ、東山、山科をぬけ小関越を経て琵琶湖岸へと戻る総距離約六十キロ、獲得標高七六一メートル、紅葉の社寺を観光しながらのライドだ。天気は快晴、先導する吉本さんは全体の様子を伺い、参加者は互いの実力を試す競い合いが若干発生しつつも助け合う心地良いライドであった。お店に戻ると皆さんはソフトクリームを注文している。これは吉本さん拘りの配合ソフトでコーンも選りすぐりのものらしいが、これも採算が怪しい。最後に「どてるし」の名前であるがお店で質問すると答えてくれることになっている。その意味を少し漏らすと「道標」に関係している。「道標」はその場所に鎮座し動かすことのできない存在である。まさか「近江の懐」の原点に帰ってくるとは想像もしなかった。



写真31 成安造形大学生がデザインしたビワイチの日ポスター(11月3日:浜大津にて)

追記

紀要の冒頭は、二〇一九年より続く全世界に拡大したCOVID-19の影響下で生活のスタイルを変えざるを得ない状況におかれながらも、これまでの経験と実績をベースに、スタンスを変え新たな一歩を企て、その一歩を踏み出すクラフトマン、地域の持続に向けて動き出すクリエイター、活動家の現在を取材したものである。

ここで本来の「近江の懐」について振り返ってみたい。それは主に街道宿場町付近など近江の特色ある場にて今日に受け継がれる「技術」や「その精神」に着目することをうたってきた。筆者の着目点として唯一無二の「モノ」あるいは「コト」として最終形として「見える形」に仕上がってきた事象、結果に拘り焦点を絞っているのはこれまで同様、コロナ禍に入って特に感じるのは「モノ」「コト」を仕上げていくプロセス、つまり「トキ」から、それを実行へと企てる「ヒト」の存り様に私自身の関心が高まってきているように感じてきている。前述したが、原料調達、製造、製品管理、営業、販売などこれまで分業化されていた生産構造の仕組みでは「完全なる成功（あるいは完全なる失敗）」という結果しか生み出さないと考える。つまりそれは生産者側によるトライアンドエラーのフィードバックあるいはアップデートを消費者側が把握することはできないと言える。今回取り上げた四地域の六者はそのプロセスを自身でマネージメントし、企てから実行

まで全てを行い、失敗と工夫が続いているのだ。それは当事者にとつての「完全なる成功」は未だ至っていないように考えることもできる。

コロナ禍、戦争、気候変動など様々な問題が直面している。実生活の影響を肌身を感じ、生活必需品の値上げが年間に数回ある事態がおきる現在、以前より増して社会の動向に気を取られ、受身姿勢になつてはいないか自身への問い直しを繰り返す。それは思考停止状態に近いと言っても良いだろう。自ら企て、行動することとトライアンドエラーの感覚を今こそ掴み直し、「ヒト」同士でプロセスを共有する「トキ」に來ているように思う。

「近江の懐」は「企ての現場」であり続けていることを伝えている。